

# 衝突

岡本俊弥



「全員そろいました、おねがいます」

卯木原紀子は小さな声で言った。

《しゅっぱつします、しーとべるとをしっかりおしめください》

いつものようにモーターが静かに起動し、軽いショックがあってから車は動き出す。右に回り、まっすぐ行くと回廊がある。

今日も終わりだ。

ふっと息を吐いて、後ろを振り返る。八人乗りだが、紀子を含めて六人がシートに座っていた。拠点ケアセンターから地域センターまで行って、そこで地域担当者に引き渡すまでが紀子の仕事だった。

窓の外では傾きかけた陽が、防眩ガラス越しにもまぶしかった。しばらくは何もな  
い。

目を瞑りまどろみだしたそのとき、紀子は耳慣れない機械音声を聞いた。

《しょうとつけいほうです、しょうとつけいほうです、しょうげきにそなえてくださ  
い……》

「榎木さん、久しぶり。こんなところに呼び出して申し訳ない」

スーツ姿の中年男性が、笑顔で近づいてきた。

笑いは、しかしぎこちなかった。言葉を選んで喋っているようだった。

ぼくは軽く頭を下げた。

ホテルのロビーだった。ホテルと言ってもリゾートホテルではない。都心にある、  
そこそこ大きなホテルである。ロビーは広いが特になにもなく、昼間だというのに観  
光客で結構混み合っている。

「ここじゃ喧しいので、おれの部屋で話さないか」

「お急ぎのようですね。仕事の話なら、会社にお伺いするのに」

「いや、ちよっとね」

男は顔を曇らせた。

ぼくはその男、館島良介と仕事をしたことがある。

当時館島はある自動車メーカーの開発部門にいた。もともと専門ではない機械能のふるまいで苦しんでいたのだ。ぼくは解決の手助けをした。

予想よりも多くの時間を供にしたためか、ぼくと館島はくだけた口調で話せる仲になった。ただ、依頼主と出入りの業者では、しよせん対等な関係とは言えない。少なくとも、ぼくはそう感じていた。

何年かあとに館島は会社を辞め、外資系メーカーに移ったと聞いた。仕事が終わったあと付き合いは切れたし、転職の挨拶も特にはなかった。

「広いじゃないですか」

室内を見て、思わずぼくは口にする。調度品はどのホテルでもそうは変わらないのだが、ゆったりとした余裕のある部屋だった。都会ではスペースこそが贅沢だ。出張

の多いぼくでも、狭いビジネスホテル以上に泊まれることなどめったにない。

「先に渡しておくよ」

館島は名刺を差し出した。

「今はこういう仕事をしてる」

Dubai Automated Air Traffic Co., Ltd. 日本支社の技術統括とある。

記憶にある社名だった。ぼくは黙って受け取った。

「今日は、非公式に相談に乗ってほしい」

「名刺をいただいたわけですから、会社の案件ですよ。守秘義務は負わなくて良いのですか」

ぼくは少し声を潜めて言った。昔付き合ったころの館島には、仕事の進め方にルーズなところがあった。館島には良くても、会社のルールに従っていないのかも知れない。

「それは……またあとで相談したい」

カーテンの引かれた窓際にある小さなテーブルを挟み、二人は向かい合って座った。

館島はハンカチを出して、わずかに滲んだ額の汗を拭く。

「うちの会社の製品を知ってるか、榎木さん」

「詳しくは知りませんが、日本に入ったのは最近でしたよね」

「ドバイではもうだいたい前から運用されている。規制が厳しい日本では、試験運用を経てようやく認可が下りたばかりだね」

「このへんじゃ、見かけませんね」

「都心部では許可が出ないんだ。郊外や地方では、もうかなりの数が使われてる」  
そのとき、ぼくはようやくニュースを思い出した。

「D A A T社というと、半年前に騒がれましたね」

館島はしばらく沈黙してから、ぼくの顔を見た。

「そうだ。国内初の大規模な人身事故だと騒がれた。世界的にも、うちの事故としては大きなものだった」

死者が十人、生存者はなし。

決して小さな規模ではないが、交通事故で大型バスやトラックなどが絡めばなくは

ない。しかし、さまざま意味で注目を集めた。

空中衝突事故であること。乗用ドローンという新しい乗り物同士が起こした事故であること。双方とも運転手がない自動運転状態であったこと。

最後が特に問題になる。安全性をうたう自動運転車の事故は、これだけ無人車が普及した今でもニュースバリューになる。事故率が低く珍しいからなのだが、世間はそう見ない。危険だ、メーカー責任だ規制強化だと、騒ぎになるケースが多い。これが空中車の場合、注目度が高い分、さらにネガティブに増幅される。

D A A Tは世界的なドローンバスのメーカーだ。バスといってもマイクロバス並で、旅客機や路線バスほど大きくはない。

「あのときは、まあいろいろあった……」

館島は言葉を濁した。記者会見の映像で見かけた憶えはないが、技術責任者だとすると、メディア対応だけで大変だったろう。館島が人に頭を下げている姿は想像し難かった。

「……事故調査は終わり、近々報告が出る」



法整備の遅れている日本では、空飛ぶ車の事故でも、航空機事故として調査が行われる。警察が現場検証して後は書類、というわけにはいかない。コストも時間もかかるが、終わったところには世間はとっくに関心を失っている。

「結構早かったんじゃないですか。運輸安全委員会の報告が出るのであれば、確定したわけですね」

「いや、まだ経過報告なんだけど」

汗を再び拭って、舘島は押し殺すように言った。

「まずいことが書かれている」

その日、地域中核市と周辺市の間を飛ぶドローンバスは、定刻通りにデイケアセンターを離陸した。バスは空中車に許可された飛行回廊まで、一気に上昇する途中だった。

地方の人口減少区域では、高齢者施設の統廃合が進んでいる。デイケアセンターは中核市にしかなく、道路事情が悪化するなかでの日帰りサービスは、地上車の送迎で

はほぼ不可能になっていた。ドローンバスは、そういった地理的な問題を解消する。直線で結べば、たいていの過疎地は飛行時間三〇分以内の最短距離でまとめられる。

介護士の卯木原紀子は午前中に周辺市の拠点を回って、センターまで老人たちを運んでいた。自力で動けない人たちだ。紀子はリタイア直前の介護士だった。サポートスーツを着ても、ベテラン一人では動けない老人の乗降に手間がかかる。

定められた手順どおりに、センターでのサービスは終わった。午後になって再び、老人たちはバスに集められた。介護士は、法で定める空中車乗務員のための安全講習を受けている。だが、バスで実際にできるのは、シートベルトの確認と、機械に出発を合図する程度なのだ。

衝突警報を聞いたあと、紀子はベルトの許す限り身を乗り出し、フロントガラスから前方を見渡した。

斜め上の方向に、傾いた陽を受ける別の飛行車が見えた。赤と黄色のストライプが目立つタクシーだ。バス以外の飛行車を見かけることはめったにない。あっても、い

つもなら側面を見せて遠くですれ違う。だが、いまは真正面から接近してくる。

ぶつかるのか、紀子はタクシーを凝視したまま動けない。

機体に制動がなかったようなぶれを感じる。背後から、揺れに驚いて、かすれた悲鳴が上がった。認知に障害がある人ばかりだ。ほんとうに何が起きているのか、理解しているものはいないだろう。

しかし、タクシーは真正面のままだった。高速に飛行する両機は、見る間に距離を縮めていく。

キャノピーの向こうに乗客の姿までうかがえた。防眩ガラス越しで見えるはずはなかったが、紀子は向こうの乗客の顔を確認に見た。目と口を大きく開き、驚きで凍り付いた顔だった。

《しょうとつつけいほうです、しょうとつつけいほうです、しょうげきにそなえてください……》

「どこを飛ぶのかはすべてセット済みだ。おおぜいが乗るバスは指定した時刻、指定

した空路しか飛べないからな。いつも通りだ、何の問題もなかった」

館島は、ホテルのメモ用紙に殴り書きのような矢印を書き記した。

かつかつと神経質に、ボールペンのノックボタンを机に押し付けている。

「まずまっすぐ上に離陸する。安全高度の一五〇メートルまで上がってから、ローターを水平方向に倒す。事故が起きたのは、水平飛行に入る前だ」

高度一〇〇メートルに達したとき、前方からタクシーが接近してきた。

上昇と下降の飛行レーンは厳密に分けられている。互いの距離も、十分間合いがあるはずだった。

ところが、タクシーは進路を変えず、まっすぐにバスの上昇レーンに侵入してきた。

職員の卯木原紀子が、いつその存在に気がついたかは分からない。

だが、例えば危険を察知したとしても、何もできなかったはずだ。バスは手動運転できない。脱出装置もない。もしこれが機器の故障に起因するエラーなら、自動的に下降して運転を取りやめる。人が介入するとかえって危険なのだ。

館島は続ける。

「正面衝突で生存者はいない。まあ、一〇〇メートルの高さから落ちて助かる奴はいない」

「タクシーには誰が乗っていたんですか」

ぼくは訊いてみた。

「親子四人の家族だ。となりのホームに見舞いに来たらしいが、まあそんなことはどうだっていいだろう」

投げやりな口調で館島は言った。

親子四人、子ども二人はまだ小さかったはずだ。バスに乗っていた九十才前後の老人全員の死も、何度かニュースで繰り返された記憶がある。生き残った者はなく、過疎の地域では目撃情報もほとんどなかった。

「調査では、両方の機体がどう動いたのかを調べる。ぐしゃぐしゃだったが、バスとタクシーの飛行データは、すべてクラウドに自動バックアップされていた。まあその点は、ブラックボックスに頼る飛行機より進歩しているよな」

ぼくは黙って頷いた。

「その結果、タクシーが整備不良による故障を起こしていたことが分かった。四つあるローターの二つが止まり、もう一つの推力も落ちていた。制御ができない状態だった。バスとは関係なく墜落は免れなかった」

「相手に主たる責任があったわけですね」

「こちらにも不備があった。近距離レーダーが不調で、事前に回避ができなかった。まあ、その程度で終わればよかったんだ。思わぬことが起こった。ふつう、車がぶつかりそうだと分かったら、避けようとするだろう。おれが自動車の開発をやっていた頃を思い出してもな。方向、速度、高度、やりかたはいろいろある」

ぼくはつぶやいた。

「そうじゃなかった、と」

「分かってからもバスは回避行動を取らなかった。というか、速度や進路を変えながら、まっすぐに衝突進路を進んでいった」

館島はボールペンを机の上に投げ捨て、ぼそりと言う。

「榎木さんは、なぜだと思う」

唐突な質問だった。

「あい変わらず無茶な質問ですね。わたしはまだ何のデータも見ていませんよ」  
「いや、同じようなものを、見たことがあるはずだ」

そう言うってから、館島は腕を組んで沈黙する。いつもなら、軽口を叩いて饒舌に喋るところだ。何を考えているのか分からなかった。

五年前、ぼくは館島と組んで、ある問題を解決しようとしていた。

自動運転車Aが走っているとき、道の真ん中に障害物Bがあるとす。道路は狭く、一車線分しかない。左右は壁だったり、危険な崖や土手があり回避は困難だ。自動車Aは高速で移動中のため、すでにブレーキは間に合わない。

ここで選択肢がある。

一つ、そのまま車Aは、障害物Bを跳ね飛ばして停止する。

一つ、壁ないし崖に車Aを衝突あるいは落下させても、障害物Bを回避する。

障害物Bの大きさにもよるが、ふつうなら、車Aは乗客が生き残る確率が高い前者

を選択するだろう。

あ のとき、ぼくは再現されたシミュレーションを見ていた。シミュレーションといっても、自動運転車には百を越えるセンサーが付いている。複合センサーもあるから、量で数えるなら千個以上かも知れない。それらを使えば、何が起こったのかをミリ秒単位で再生できる。

車が高速道路を走行している。

片側一車線の区間だが、混雑する時間帯ではないのか、渋滞もなく、スピードは制限いっぱいまで出ている。

すると、路側帯に車が停車しているのが見える。

故障車が待避中であると、メッセージが流れる。

車はわずかに速度を緩め、脇をすり抜けようとする。

その瞬間、故障車の道路側ドアが開く。

押し開いたのは、小学生くらいの女の子だ。



後に、故障車の安全ロックが解除されていたことが分かる。

衝突までの時間が明らかになる。すでに安全な回避はできない。

車はそのときハンドルを右方向に、分離帯側に大きく切る。

結果的に、車の安定性は失われ、横転事故が発生する。

乗員二名のうち、一人が亡くなり、もう一人は重傷を負う。

故障車側の被害はなかった。

そう、障害物が人間だったとき問題が生まれるのだ。

障害物（人間）を跳ね飛ばすのか、車の乗員（人間）を犠牲にするのか。どちらの人間を生かすのが「正解」なのか。

犠牲者から訴訟が起こされた。

避けられたはずだ、と原告側は主張した。事故を起こしたのは、自動運転車の機械による判断ミスだったと。

「いいか、ハード的にもソフト的にも間違いはない、それが答えだ」

社員や派遣、外注者など関係者を集めた朝礼で、舘島は訓示した。

「誤りなんか無い、正かったとな」

すでに品質保証部門の検査で、機構部分、つまりハード側に不具合は見られないとする報告が出ていた。各種センサも正常範囲だった。一方、途中からぼくが呼ばれたことを見ても、ソフト関係は難航したらしい。

自動運転車の行動は、無数の経験を統合した結果だ。個々のケースごとにコーディングされものではない。ある事象で何を行うかは、学習の深さが決める。

逆に言うと、その場になってみないと、何が起こるか、どんな判断がなされるのかは分からないのである。

「何でもいから証拠になる理由を見つけ出せ。とにかく正しさの理由だ」

舘島は、くどいほど繰り返した。

機械知能が誤動作する原因を探るのが、ぼくらBAT、機械の精神分析医本来の仕事である。誤動作していない証拠とは、まったく正反対の指示だった。

「なんとかしてよ、榎木さん」

始めから館島はため口だった。相手が自分より格下の人間ばかりなので、口調に丁寧さはなかった。そういう客もいる。ぼくは慣れていた。

「再現実験は、終わっているんですね」

「腐るほどやってるさ」

「同じ結果だと」

「まあ、同じ条件でやって、同じ結果になるのは当然だ。みんな機械がやってるんだからな。だが、その理由が分からない」

「機械の学習データは、出荷時点で固定されるのですね」

「他社はいろいろだが、少なくともうちはそうだ。客先で勝手に変わっちゃ、保証もできなくなるからな」

「もともとの学習データは、御社オリジナルですか」

「ベースはベンチャーから買ったものだ。そのあと、うちでデータを追加している」

「何を追加したんですか」

「何をもって……」

館島は口ごもる。機械知能は専門外で頼りないと、周りから聞いていた。

「調べていただけませんかね、そこが重要です。できれば、もとのベンチャーデータの素性も含めて」

ベンチャーというのは、メーカーが出資しているアメリカの会社だった。豊富な公道試験から得られたデータだ。簡単に公道を使えない日本メーカーの場合、規制が少ないアメリカや中国など、外国のデータを買ってこないと十分な学習が行えないのだ。

「追加データも御社のものではありませんね」

「ああ、作らせている。もと地図屋のシステムハウスだが」

「道路のデータですか」

「道路事情は国によって違う。特性に合わせて作り換えなきゃ使えない」

「事故対応の学習は、その際に行われたのですか」

「ああ、たぶんな」

あいまいな答えだった。

ぼくは同時に、データに含まれる自動運転車の事故事例をサーベイした。初期に多

かった、画像センサの目視ミスやレーダーの死角によるミスは除いた。明らかに対象  
II 人が見えていた場合の人身事故を探したのだ。

だが、そういうデータは含まれていなかった。

「なぜ、入っていないのですか」

「人身事故は国によって違う」

「車が人を撥ねるのは、どの国でも同じでしょう」

「物理的にはそうだろうが、国によって責任は同じにならない」

「責任ですか」

「ぶつかったときにどちらが悪いのか、たとえば、脇道から車が飛び出して事故にな  
ったら、飛び出した方が悪くなる。そういう責任は、ところによりけりだろう。だか  
ら学習データには入っていない」

代わりに、日本の警察と保険会社が保有している事故事例を学習させている。どち  
ら側の過失なのか、過失の割合はいくらなのか、報告書段階では明確になっている。

担当者に聞いたのか、舘島はそう答えた。外国のデータをパラメータ補正し、加え

て事故事例を静的に学習させたわけだ。

十分とは思えなかったが、ぼくは黙っていた。

館島の会社は、かつて世界規模の一流自動車メーカーだった。しかし、パラダイムシフトが起こり、頂点のメーカを支えていた産業ピラミッドが崩れてしまった。内燃機関からモーターへ、マニュアル運転から自動運転へと変わった自動車を支えるのは、もう旧来のサプライチェーンではなかった。

最新の自動運転車には、エンジンもハンドルも、そもそも車軸さえない。ドライバーングシートは残されているが、寝ていても違法にならない単なる座席なのだ。最重要部品は、畑違いの機械知能と学習データである。旧来の部材メーカーは半減し、抱えられない労働者も半分になった。構造不況に陥った自動車メーカーでは、終わりのないリストラが横行した。

加えて、自動運転車では、裁判沙汰が何件も起こっていた。つぎはぎの技術で作られた車は不完全でもあった。そういう時期だったともいえる。

開発部門の館島は、訴訟対応に駆り出されていたのだ。

「まったく、いつまでかかっているんだ。ぐずぐずしてる余裕なんかないんだよ。一日遅れるたびに、十人首を斬られるんだ。分かってんのか。さっさと結論を出してくれ。おれを首にするつもりか」

館島は声を荒げ、部下を叱っていた。同じフロアには派遣や外注業者もいるのだが、館島は機嫌の悪さを隠さなかった。自分が上司から叱責されている内容を、そのまま垂れ流しているように思えた。

「期日通りに結果が出なきゃ作業料なんて払わんど、おれもいつまでもこんな仕事はやってられない」

そんな言い方はないだろう。

業者に対しても、同じ調子でクレームをつける館島をぼくは呆れて見ていた。

「あのときは」

五年前に比べ、少し痩せた顔に変わった館島は言う。

「うまい答えを見つけてくれた」

「そうでしたっけ」

「機械の判断は人間と同じだ、となったじゃないか」

「いや、ちよつと違います。わたしはあのととき、機械は人間と同じ動作をしたと言っ  
たんです」

館島は怪訝そうな顔をした。

「どこが違うんだ」

「人間が車を運転しているとしましょう。視界を遮るものは何もない状態で、突然目の前に何かが現れる。あのとときのケースならば、後部座席のドアです。人間ならどうしたか、思わずハンドルを切るだろう、わたしはそう言ったんです」

「だからなんだ」

「人間は緊急事態が起こったとき、ほとんどのケースで論理的な判断なんかしません。反射的に行動するだけです。ただ反射的といっても、経験に基づいている。ボールが転がってくる、小動物が飛び出してくる。ここまではいい。では、子どもが飛び出してきたらどうする。経験に基づく最適な方法は何かというところ、結果どうなるかなど考



えずに避ける、つまりハンドルを切るのです。反射神経がまずまずの人間ならそうする。これと同じことを機械はしたのだと、お示ししたはずでしょう、館島さん」

館島は苛立たしげに口を挟んだ。昔が甦ったようだった。

「いちいち教えてくれなくても、報告内容は知っている。おれが最終的にまとめたんだ。機械は人間と同じ反応をした、少なくとも故障とは違うし瑕疵に当たらない、それで十分だった」

「あのとき、クライアントである館島さんの会社が、レポートをどう使ったのかは問題ではありません。でもね、わたしが指摘していた、もう一つのポイントをお忘れじゃないですか」

「忘れちゃいないさ、ちゃんと理解してる。あのときは結果的に、車側の瑕疵責任は問われなかった。保険金の範囲で収めることができたからいいが、今回の事故の方が深刻だ」

館島は右手で払いのけるような仕草をした。

「今回は避けなかった。なぜなんだ」

「館島さん、D A A Tでお仕事は何をされていたのですか」

「おれは……機械知能のローカライズを担当している。元の会社での経験を買われて、スカウトされたからな」

いつから機械知能の専門家になったのか。ぼくはちよつと驚いたが、確かに経験はあるだろう。館島なりの売り込みをしたに違いない。

「ドローンを制御する機械知能の学習データは、どこから入手されましたか」

「ドバイ本社にあったベースそのものだ。ドイツと共同開発して作成されたものと聞いている。これをローカライズしている」

「ローカライズといっても、日本では空中車の前例がほとんどないでしょう」

「そりゃないさ、実績がなかったからな。交通規則を日本の法規に合わせ、あと自動運転車に対するニュースを学習させた」

「ニュースの学習、目的は何ですか」

「おいおい、榎木さんが言ってたことじゃないか。もう一つのポイントってやつだ」  
「というと」

「いいかげんにしてくれよ。機械が判断するためには、人間の基準がいると言ったのはあんただろう」

「基準を、ニュースに求めたということですか」

「ニュースやネットを流れる意見や、まあ、そういったさまざまな声の塊だ。何を学習するかは機械にフィルタリングさせた」

「何が学習されたのか、把握されていますか」

「基準だよ。何度言わせるんだ。人間がどう考えるのかを学習させて……」

ぼくは掌を上げて、話を遮った。

「もう一度、わたしのポイントを明確化しましょう」

「そんなことは……」

「いいですか、わたしが指摘した基準というのは、端的にいうと倫理の問題なのです」「りんり、何だそりゃ。相手は機械だぞ」

「機械だろうが人間だろうが、倫理を前提にしなければ判断は成り立たないのですよ、今回のような場合には。舘島さんは、この問題からいままですっと逃げてきた」

「おい、失礼だろう、誰が逃げたというんだ」

ぼくは、不快さを隠さない館島を無視して続けた。

「五年前の問題に戻りましょう。ドアを開けた女の子と、車に乗っていた大人二人、どちらを生かすべきなのか、絶対的な規範はない。基準は社会によっても、時代によっても違う。館島さんは以前、交通法規や過失割合の違いだけのようには言われませんが、それだけじゃない。国や住んでいる人々によって、倫理観の違いがある。

ある社会では、大人より子どもの女の子を助けるべきだと考える。子どもには将来がありますからね。しかし、大人が社会的に高い地位のある人なら、大人を優先すべきと考える社会もある。社会を支えるキーマンの生存は、結果的に社会全体の安定につながる。大人が老人なら、老人を優先すべきとする考えもあるでしょう。長く生きたい人は、知恵も運もあり尊敬に値するというわけです。アジア特有の倫理観ですね。日本の場合は老人が増えすぎて、そう考えない人も多くなりましたが。

同じ問題に別の答えがある。答えは出すのは個人ではなく、個人の思想を形成してきた社会の倫理観でしょう、違いますか」

「だからこそ、学習させるんだろう。思想なんて誰が教えられるんだ」

「確かに、機械に抽象的な社会倫理を学習させるのは難しいでしょうね。では、舘島さんは何を期待して学習をさせたのですか」

「おれは社会常識を教えたんだ。だってそうだろう、ニュースやソーシャルネットを流れる情報は、社会そのものはずだろう」

「そのまま使おうと、間違った常識を学んでしまうとは思いませんか」

「さっきあんたも言ったじゃないか、社会によって倫理は違う。常識に間違いも正解もあるもんか。社会の音が、ときどきの社会の考えなんだ」

「五年前、機械は人間と同じ行動をとりました。なぜかという、機械は独自判断をしないように訓練されたからです。」

機械は無数のセンサを持っています。反応速度も比較にならない。人間よりもはるかに判断を下す時間が短くて済む。人間のような動物的直感に頼らず、より合理的な判断ができるはずです。しかし、与えられたデータの中の判断材料に、人間の行動しかないとなると、同じことをせざるを得ない。判断基準が学習されなかったのは、デ

ータを与えた側に責任があるのです。

今回は少し違う。舘島さんの与えたデータには判断基準があった。しかし、あったのはどんな人間が死ぬと騒ぎになるかという基準だった」

「ちよつとまてよ、そんなことはないだろ」

「自動運転車の事故で何がニュースになりますか。物理的な事故の情報はほとんど流れません。警察がデータを出しませんからね。犠牲者が誰で何歳だったか、どんな人物だったか、どんな悲劇だったか。これらの反響が判断基準になると思いませんか」

「何か問題があるのか」

「機械としては、反響を高めたくない。そりゃそうでしょう、ネガティブな規範として与えられたからです。ではどうするのか、反響が最小限となる行動を取る」

「騒がれないようにという意味か」

「たとえば、若い家族が乗った車と老人が乗った車が衝突するなら、老人側が生き残ってはいけない」

「ばかな、なぜ」

「家族がもう助からないのなら、老人も同時に助からなくする。今のネットは財政を  
圧迫する老人に批判的な論調がメインですからね」

「おい、ネット受けするためにわざと殺したというのか」

「ネットでの反響を最小限にするための行動を取った」

「死人が多い方が騒がれるんじゃないのか」

「おそらく完全な回避はできないと機械は判断したのでしよう。家族が死ぬのは避けられない。すると選択肢は二つしかない。老人をいくらか生き残らせるか、全員死ぬのか。生存者がいれば、ネットの反響は長く、全員死亡だと、すぐに情報は尽きて忘れられてしまう。学習結果はそう教えた」

館島は青ざめた顔で黙り込んだ。

「館島さんは五年前と同じことをしていますね。ブラックボックスのデータ、期待値が曖昧で正確さが保証されない機械学習、不十分なシミュレーションと実機試験」

ちよつと言いきすぎたかもしれない。

はっきり言って、ぼくは今回の事故の原因が、倫理にあるのかどうかの断定はできない。データ解析もシミュレーションもしていないからだ。いずれ出る公式事故報告書にも、そんなことは記載されないと思う。

ただ、世の中で動く機械知能のいくつかには、館島が関与したものののように、倫理的問題のある判断基準を持つものが混じっているのだ。ふだんは気にならないが、究極の選択の時に何が起こるかわからない。

「だがしかし、」

ホテルの正面扉が開き、風が吹きつけてきた。ぼくはポケットに手を突っ込んで、道路へと歩き出す。

「そもそも、機械を断罪ができるほど、人間に倫理感があるとは思えないがね」  
寒気を感じて、ぼくは思わず首をすくめた。